

書物の行く末



5

夕暮れ時、山の形をした屋根を持つ建物の窓から柔らかな明かりがもれ、名前の由来そのままに町を照らしていた。当地に滞在した葛飾北斎や、名物の栗菓子で知られる長野県小布施町。新しい町立図書館「まちとしまテラソ」は2009年夏に開館した。

「リンクエスト」に伝え、蔵書を増やし、貸すだけではもったいめだ。情報で人と人、地域と地域を結ぶ交流と創造の場でありたい。図書館本来の姿を見つめ直し、世界一の図書館をつくりたいと本気で思っています。テレビディレクターとして東京で20年活躍した後、公募で館長になった花井裕一郎さん(48)は、福岡県小竹町出身。はそう話した。花井さんの言う「図書館本来の姿」とは法律、である。

〈図書、記録その他必要な資料を収集し整理し保有して、一般公衆の利用に供し、その教育調査研究レクリエーション等に資することを目的とする施設〉(読書会、研究会、鑑賞会、映画会、資料展示会等を主催し、及びこれらの開催を奨励する)(図書館法) 話題作を大量にそろえる一部は無料貸本屋と提携されることもある。果たして現在の公立図書館

図書館 知的生産の未来を担う



「地域の情報も連想検索システムに加えたい」と話す長野県小布施町立図書館の花井裕一郎館長

は、法にのっとって運営されているのか。

そんな疑問を出発点に、花井さんは、本を核にした知的生産と交流の場づくりに励む。映画会やアート講座など多彩な催しを開く。国立情報学研究所が開発した検索システム「想R.D.Dシステム」も全国で唯一、導入した。答えを絞り込むのではなく、拡張する連想検索だ。現在は新書の一部だけが、本を読み取り機に置く、関連する本や文化財、百科事典などのさまざまな情報がモニターに表示

電子書籍が普及すれば、図書館の本も電子化され、自宅からインターネットで「本」

示される。人間の連想には限度があるから、連想検索で「知」の領域を広げ、「教育、調査研究に資する」を試みた。「書棚で本を探すと、周りの本を手にとることがあるでしょう。その感覚です」

花井さんは、館が所蔵する昔の和と本や地元美術館、博物館の資料を連想検索に加える準備を進めている。中央に集められた情報を検索して享受するだけでなく、地域の情報発信し、連想のネットワークに入っていく「電子書籍」とどう対処するか、というだけでなく、電子の使い方をもっとあるはずだ

電子書籍が普及すれば、図書館の本も電子化され、自宅からインターネットで「本」

を借りられる時代がやってくるだろう。 読書省は昨年、神奈川県鎌倉市図書館で電子図書館の実証実験をスタートさせた。自宅のパソコンで利用できるモニターに登録し(登録期間は既に終了)、実際に体験してみた。

IDとパスワードで入館し本を選ぶ。3D的な画像を360度全方向から眺められる「日本の昆虫」などの図鑑や、音声で聞ける英語教材は電子書籍の特徴を生かしている。24時間利用でき、ペンで線を引いたり、メモを書き込むことも自在で、貸出期間が経れば自動返却されるので遅滞もない。同じ本を複数の人が同時に借りることはできない。

だが、約千タイトルの児童書は少々期待外れだった。文学のジャンルは福田寿賀子さんの随筆などわずか6冊。これとは別に、著作権切れの小説を収めた「青春支那」の500冊もあるが、ネットで無料で読めるので借りる必要はない。

東京都千代田区立図書館は実際に電子書籍を貸し出して「場所を取らずに蔵書を増やしたい」との狙いで、年々導入した。蔵書が重複しないように、紙で所有する本は電子では入れていない。電子蔵書は当初の3100から約4700に増え、「学生やビジネスマン向けの資格試験 英語教材が人気」という

全国から視察が相次いだ

が、今月8日大阪府堺市立図書館が導入するまで、追随はなかった。最大の理由は蔵書の数が乏しく、選択の幅が狭いこと。図書館における電子書籍の扱いは、技術や運用のルールが整備されておらず、本を提供する出版業界も消極的になっている。千代田区立図書館の担当者は「電子書籍の普及とともに公共図書館での導入が増えれば、展開も変わるのでは。ハリアフリにもつながる電子化の二刀ズはあるはず」と話す。

その導かない未来、紙の蔵書を持たない電子図書館が登場する可能性は大きい。これまで図書館に身を置いて、同様のことを電子端末の前で済ませるようになったら、図書館の役割は変わってしまうのか?

別府大学の石井保廣教授(図書館情報学)は「図書館がなくなるとはいはないだろう。図書館には同書を中心とした情報の本気関係人という役割があるから」と言い切る。

読書会や研究会などに力を注ぎ、図書館が「本来の姿」を取り戻すことも考えられる。近い将来、図書館に、こんな本文が加えられるかもしれない。

〈集積した「知」から検索して絞り込む情報センターとなること〉(利用者の興味や知識を拡張する創造的空間となること)